

【日本藝術学関連学会連合第7回公開シンポジウム】資料

「地・人・芸術—〈芸術と地域〉を問う

2012・6・16(土)13:00—16:30

仙台市博物館ホール

「地域と演劇～文化・芸術活動の起点にあるもの」

渡部泰山(東北芸術文化学会)

◆発表要旨

人間はそれぞれさまざまな社会的役割を担いながら、社会内に存在し、物と社会構造そのものを加工・変容させてきた。いわば、人間の存在そのものが、人間の作り出した物と、それにかかわる人間関係の総合的な所産(営み)である。私たちの肉体と精神は、ことば、物、様式(意匠)、景観、伝統、民俗、芸能など、その総合的な所産(営み)の記憶(体験)の装置とも言える。

個人の記憶がいくつも他者の記憶と接続、増幅し、社会的・文化的に昇華されようとするところに表現行為は生まれる。ポーランドの演出家 註1 Jerzy Grotowski、(1933年 - 1999年)の「ただある一個の肉体と他者のまなざしがのこる」ということばのうちには、人間の存在、芸術所産の社会的関係の深い意味づけがある。

2011・3・11の大災害は、グローバルな時代とハイテクノロジーの発達、その社会のもたらした諸問題を、地域、日本、世界を串刺しにして、寄って立つべき文化的営みの根本的命題を灰塵の中から問うている。「地域とは何か」が、地の人の生きた皮膚感覚も含めて、20世紀以降、これほど本質的に問われ、今なおその問いの重さと深さに逡巡している。

地域の衰退、人間関係の希薄さが深刻に叫ばれてきて久しい。中でも、社会構造、それに伴って、人としてあるべき存在が、システムチックに巧みに管理・機能性のみが重視され、自然(大地)は人間関係と分離されてきたことは、より深刻化を増している。

1990年に、山形県新庄市の一角に「東北幻野」という表現集団を組織した。以来、今日まで23年間、オリジナル戯曲による舞台(演劇)をはじめとして、映像、美術、舞踏、音楽など、さまざまな活動を展開してきた。地域の衰退と人間関係の希薄さを目の当たりにしつつ、地域に生きる人間がどのように社会と向き合っていくべきか、人間らしく生きるとはどういうことか、それに寄り添う芸術とは何か、その可能性をひとり一人がそれぞれの視点・活動ベクトルから探っていくという立ち位置、問題意識を底流に沈めた。狭い地域主義を超えて、真に個性的なもの、真に地域的なものの中にある普遍性を探りたいと思う。

註1

「貧しい演劇」を提唱、簡素で禁欲的な空間と徹底した訓練による俳優の肉体を重視する。クラクフの国立演劇大学俳優学科(1955)および監督学科(1960)を卒業。1984年アメリカに移住。1985年からはイタリアを拠点に活動を続けた。その間、様々な大学で教鞭もとる。著作 「持たざる演劇めざして (Towards a Poor Theatre)」(大島勉〔訳〕 出版:東京:テアトロ,1971)ある。

◆発表要旨に添って

- ・**時代の諸相と地域**—「テクノロジーの発達、管理、機能性を重視した社会の構造」→註 2
作家・永山一郎(「永山一郎全集」・冬樹社版)の小説「分婉」「視力」が提起した人間の問題。

註 2

「作家・永山一郎」(山形県・金山町生)。昭和 9 年(1934)8 月 11 日、金山町に二男として生まれた。農業を生業としつつも、祖父は町議会議長、父は小学校校長という環境。昭和 28 年(1953)県立新庄北高校を卒業後、山形大学教育学部第二部に入学、昭和 30 年(1955)を終了、同時に四月から金山町立金山小学校教諭として赴任。昭和 39 年(1964)3 月 26 日、午後 7 時ころ、古口小学校離散を終え、新庄市本合海福宮地内の国道 47 号線からモーターバイク(ホンダ・スーパーカブ)のまま側溝に転落、29 歳の若さで死亡。

- ・「**東北幻野**」という表現集団の結成(結成 24 年目)。→演劇活動を通して、地域で生きることの意味と幸いの在りかを探す旅。人間の日々の生活に寄り添う芸術、活動の意味を求め。
- ・地域における演劇、芸術活動の可能性→閉鎖性の連なる呪縛→演劇活動、それはことごと肉体性を介在させながら、対面的に地域の人々と出会うことの復活と再生を意味→やがて、地域の人々との協働、学校教育との接続が生まれる→「智恵子・千年の恋」パンフを参照

※「**智恵子・千年の恋**」公演の意味→地域のアマチュア劇団を市民の有志が招聘(実行委員会)、教育委員会が共催→「芸術の地産・地消」化運動←これまでの中央の有名な劇団を招聘する「演劇鑑賞会」的スタイルとはまったく違うコンセプトが立ち上がる。→「ただある一個の肉体と他者のまなざしがのこる」新たな関係の構築→人間の存在、芸術所産の社会的関係の深い意味づけがある。

- ・地域での 23 年の芸術・文化活動の延長線上に見えてきたものは、地域の芸術文化活動を持続的に豊かに展開していくためには、地域の児童、生徒とのかかわりの必要性を実感したということである。地域の子供たちの芸術・文化環境の醸成を図るというものであった。子どもたちを取り巻く社会・文化環境の貧しさというものが、抜き差しならないものとして、大人たちの眼前に現れてきていた。

※**新庄市子ども芸術学校の開設**—2005 年新庄市教育委員会において、今後 10 年を見通し長期教育プラン「いのち輝く新庄もみの木教育プラン 21」(以下「プラン 21」)が策定された。その中の第 3 章「まなびの世界をさらにひろげます」、第 4 節「うるおいのある芸術文化を創造し育みます」に、「美しいものや、心を動かすさまざまな出来事との出会い、感情や体験を豊かに表現する楽しさを味わわせ、芸術・文化に親しむ素地を培うために、主として小・中学生を対象に、芸術学校を開校します」と記された。その「プラン 21」を具体化するため、2006 年 10 月に検討委員会が設置された。そこに私は参画を要請さ

れ、具体的なカリキュラム、予算の検討が進められ、2008年5月に開校にこきづけた。市の教育委員会は、地域の文化活動を展開している団体からの支援と活用、連携することで、地域の芸術文化の地産地消化を図り、子どもたちの豊かな芸術文化環境を醸成していこうというねらいがあった。そういう意味では、私たちの活動の今後の展望と一致し、おもに演劇活動からの全面的支援を図った。

・地域における芸術活動の可能性と意味

❖ 演劇は「見る」－「見られる」関係性から形を現してくる。セリフ、衣装、メイク、道具、照明、音楽とのセッション→コミュニケーションの介在→種々の問題の顕在化(社会構造そのもの)→「新しい学びの場」であり、「人間の居場所」、「自分自身」の確認→「ことば」にする「かたち」する→表現させることの重要性＝「描く」「読む」「歌う」→「演ずる」→人とふれあう幾層の深さが存在→「他者との出会い」「体との出会い」「声との出会い」「ことばとの出会い」→相互の働きかけ→「気づき」→演劇行為を通じた幾層もの出会いの体験こそが、地域社会での人間の新たな関係性構築の重要なファクターになりえる。